# ラザロの墓で涙を流すイエス

## ヨハネ福音書11:30-37

【新改訳 2017】

**11:30** イエスはまだ村に入らず、マルタが出迎えた場所におられた。
**11:31** マリアとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、ついて行った。
**11:32** マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」
**11:33** イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、
**11:34** 「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。
**11:35** イエスは涙を流された。（Jesus wept）
**11:36** ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」
**11:37** しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか」と言った。

## 【祈りながら考えよう】

（１）主が「霊の憤りを覚え」たのは誰に対してのものでしたか。なぜですか。

（２）悲しんでいる人に対して同情心または親切心を向けることは、どのような報いを与えられることになりましたか。

（３）イエスが涙を流されたのはなぜですか。それは主がどういうお方であることを意味していますか。

## 【解　説】

### （１）マリアはイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った

マリアは、イエスが来ていることをマルタから知らされ、「**先生があなたを呼んでおられます**」ということばに彼女は立ち上がり、村はずれで待っているイエスのところにやって来た。マリアはイエスの姿を見ると、その足もとにひれ伏し、マルタと同じことを言った。

**「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。」**

マルタとマリアは共に、イエスの到来に望みをかけていた。イエスが到着すれば、ラザロのいのちは助かると確信していた。そのイエスが来ないことを、彼女らはひどく残念がっていた。

恐らく、「もし主が来てくだされば、ラザロは死なないですむ」と繰り返し、同じことばを口にしていたに違いない。この言葉は、まるっきり不信仰の言葉とは言えないが、そうかと言って、りっぱな信仰の言葉とも言えない。

主に対する不平の気持ちが見られ、また主がそこにいてくださらなければ、人をいやすことができないという不十分な信仰でしかない。マリアはイエスの「足もとにひれ伏し」たが、マルタはそうしなかった。マリアはマルタよりも気がやさしく、性格的に線が細く、そのため姉よりも徹底的に打ちのめされ、絶望していた。

マリアはイエスに「お目にかかると」、その足もとに泣き伏した。たぶん、その瞬間まで、彼女は気持ちを制し、イエスが来られたとマルタが告げた場所にまで走って来たのであろう。しかし、実際に主イエスに出会い、幾日間もその姿を待ち焦がれていたことが思い起こされると、情緒的に耐えられなくなり、泣き崩れたと思われる。
彼女に付いて来ていたユダヤ人たちも泣いていた。

### （２）霊に憤りを覚え、心を騒がせて

**「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、」（33節）**

「**霊に憤りを覚え**」と訳されている言葉（ギエムプリマオマイ）は、新約聖書の他の個所では、「きびしく戒める」とか、「きびしく責める」と訳されており、深い感情の表現としての憤りを意味する言葉である。主は何に対して憤りを覚えられたのか。

自分の兄弟ラザロの死によって信仰のきびしい試練を受け、悲しみに打ちのめされている姉妹たちを目の前にして、イエスは、人類の最後の敵である死が彼らを支配している現実を感じ取られた。

神の御子であるイエスがこの世に来られた第1の目的は、この死を滅ぼして、人々に永遠のいのちを与えることである。イエスの霊に激しく燃え上がった憤りは、悲しむべき悲惨と嘆きの上に支配者として君臨している悪魔を見すえて「**霊に憤りを覚え**」られたと思われる。

さらに「**心を騒がせ**」られたのはなぜか。この言葉は、「悩ます」とか「心を動揺させる」という意味であり、それは、目にされた悲しみの場面のため、マルタやマリアに対する同情からのものと思われる。

### （３）彼をどこに置きましたか

**「『彼をどこに置きましたか』と言われた。彼らはイエスに『主よ、来てご覧ください』と言った。」（34節）**

主は「**彼をどこに置きましたか**」と尋ねられた。すべてを見通しておられる全知全能の主が、このような質問をしておられるのは、ご自分がご存じないからではない。

質問されたのは、親しい友人として深い同情心を示し、ラザロの墓への関心を示すためであったと思われる。神がかつてアダムに「**あなたは、どこにいるのか**」と尋ねられたのと似ている。

### （４）イエスは涙を流された

哀悼者たちは、主がマルタとマリアと一緒に、墓前で悲しみを共にしようと望んでおられると想像して、主を墓にお連れしたに違いない。

「**主よ、来てご覧ください**」と言った時、「**イエスは涙を流された**」

主が涙を流されたのは、新約聖書の中に三回出て来る。主がエルサレムの都をご覧になった時（**ルカ19:41**）と、主が祈られた時（**ヘブル5:7**）と、この個所である。

イエスが「**涙を流された**」（**35節**）という事実は、主が真に人間としての性質を持たれたことの証拠である。どうして主はここで涙を流されたのだろうか。文脈から見て、一番自然な解釈は、マルタやマリアやそこに来ていた人々の悲しみに同情されたからである。

主は悲しみや苦しみの中にいる人々に対してあわれみ深いお方である。主が涙を流されると、ユダヤ人たちは、こう言った。「**ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか**」（**36節**）

彼らは、素直に主イエスの愛をそこで感じ取った。

**「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」（ヘブル4:15-16）**

主イエスは、やさしさと同情心に富む救い主であることが示されている。主は、私たちの弱さに深く同情し得るお方である。悩みの折、主のもとに赴き、心を注ぎ出す時、主は私たちの置かれている境遇を察し、あわれんでくださる。

かつて地上にあって涙を流されたお方は、今や、父なる神のそばに助け主としておられる偉大な大祭司である。

聖母マリアのほうがイエスよりも罪人の心をよりよく知るなどと言うのは、無知であり、冒涜的である。イエスがこれほど同情心に富む救い主であるのに、別の仲介者が必要だなどと教えるのは、愚かで、異端的である。

### （５）悲しんでいる人に対して同情心を向けることの幸い

マルタとマリアが兄弟ラザロの死に出会って悲しんでいる時、彼女たちを慰めるために来ていたユダヤ人たちは、彼女たちへの思いやりを持っていた。喪失経験のもとにある二人に同情し、可能な慰めを与えようと親切心からやってきた。そしてそのことによって、期待しなかった豊かな報いを与えられた。

これらの出来事は教訓として記されたと考えてよい。悲しんでいる人に対して同情心また親切心を向けることは、意識するとしないとに関わりなく、その人自身にとっても幸いなことである。

親を失った子、悲嘆のうちにある寡婦を訪ね、泣く者とともに泣き、互いに重荷を負い合い、悲痛を和らげ合うこと、これらは罪の贖いとはならず、天国に入る保証ともならない。しかし、それは健康な心の働きであり、尊敬すべき奉仕である。不幸になる秘訣は自分のためにのみ生きることであり、幸福になる秘訣は隣人を幸福にしようと努めること、また小さな善行に務めることである。ソロモンによって書き残されたのは無意味ではない。

**「祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。……知恵のある者の心は喪中の家にあり、愚かな者の心は楽しみの家にある。」**
**（伝道7:2,4）**

親身になってマルタとマリアを励まそうと来ていたユダヤ人たちは、イエスが行われた最大の奇蹟を目撃することとなった。ラザロが墓から出て来た際の目撃者となった。「**マリアのところに来ていて、イエスがなさったことを見たユダヤ人の多くが、イエスを信じ**」（**ヨハネ11:45**）救いの恵みにあずかる者となった。

### （６）あら探しをする人々

**「しかし、彼らのうちのある者たちは、『見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか』と言った。」（37節）**

この一文は、主イエスの善良さを全く認めようとせず、なんとかその行いに欠点や落ち度を探し出そうとする敵対者の声と思われる。皮肉を込めた軽蔑の響きがある。

主がこの時しようとしていたことが何であるか知らない彼らは、「**見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか**」と嘆くのであった。